

元気源

リーグ連覇をめざす広島カープの本拠地・マツダスタジアム(広島市)で、練習に汗を流す選手たちを穏やかな目で見つめる。「手も口も出さない。優秀な後輩が多いから、選手に寄り添って半世紀余り。1975年の初優勝を含め、計7度のリーグ優勝を間近で見えてきた、カープの生き字引だ。」

地元でのナイターの日。選手たちが試合前の練習を始める午後2時前ごろ、スタジアムのコンコースを約30分かけてゆっくりと3周歩き、体を温めてからベンチに入る。「ちょっと体を診てくれない」と「指名」があれば、マツサージを施す。「体をチェックしながら、昔話をする。リラクセスさせるのも仕事のひとつだから」

広島カープ トレーナー部アドバイザー 福永 富雄さん 74

話に出るのは、連続試合出場のプロ野球記録を達成した「鉄人」の衣笠祥雄さん、「ミスター赤ヘル」の山本浩二さん、日米通算2003勝を挙げた黒田博樹さん。「カをフルに出せるような体を鍛え、氣遣う。それが優勝に結びつく。その伝統は引き継いでほしい。名選手の手姿を伝える言葉は、選手たちの心にじわりと染みこむ。」

山口県下松市出身。実家が鍼灸院だった関係で、専門学校で柔道整復師の免許を取得し、63年に入団した。今こそトレーナーは14人を数えるが、当時は2人だけ。本拠地はもちろん、遠征にも同行し、シーズン中、まともに休める日は数えるほどだった。

骨折しても、本人が「出る」と言えば止められない時代。衣笠さんは、死球で肩甲骨を亀裂骨折しても試合に出たことがある。「無理して出ている選手が心配で、一睡もできない夜もあった」。ストレスからか、十二指腸潰瘍を患ったこともある。

約10年前から本格的なリハビリや故障への対処は若手に任せ、スポーツ紙を読んだり、スポーツ番組を見たりする余裕ができた。「や」と野球を楽しんで見られるようになった」と元気がいっばいだ。

コーチ、現場スタッフでは最年長。50年間、喜怒哀楽、いろいろありすぎて、でも、勝つ喜びをみんな分ち合えることほど、う

勝つ喜び 分かつ喜び



マツダスタジアムのスタンドで練習を見守る福永富雄さん(広島市南区で) 一野本裕人撮影



お気に入り 多ジャンルバンド演奏

高校生の頃、大人気だったエルビス・プレスリーにひかれて、ギターを我流で練習し、フルートも習った。

今も複数のバンドに参加。主にシーズンオフに広島市内のライブハウスなどで、アメリカンポップスやハワイアン、ジャズ、フォークなどの演奏を楽しみ、ボーカルとして歌うこともある。

「ずっと音楽に親しんできたので、人生から切り離せない存在。オンとオフの切り替えがうまくできているのも音楽のおかげかな」という。



サポート コーヒー片手気軽に交流

元広島カープ投手 安仁屋宗八さん(72)

「入団した時期がほぼ同じで、50年以上のつきあい。試合の後には勝った祝い酒、負けたら残念会と理由をつけては飲みに行きました。」

仲間から

責任感が強く、選手はもちろん医療関係者や他球団のトレーナーなど、幅広い分野の人たちに信頼されています。これほど長く活躍できるのは、知識と経験に加え、人徳があるから。カープの財産だと思います。」

の育成をめざし、認知症の人が歩いて通えるカフェを増やしたいと話している。



認知症カフェ「ガーデンカフェ」(福山市)

認知症の患者や家族、地域住民らが交流する「ガーデンカフェ」が毎月1回、福山市内の福祉施設で開かれている。運営する福山平成大学教授の中司登志美さん(56)は、「街全体で支えることができれば」と地道な活動を続ける。

患者がコーヒーなどを飲みながら気軽に会話を楽しめ、家族も悩みを相談でき

るようにと、介護福祉士などの専門職が対応。住民や学生がボランティアで支えている。

「認知症の人が安心してくつろげる雰囲気づくりを心がけている。地域の方にもカフェを通じて認知症のことを深く知ってほしい」

さらに「認知症を発症した人をサポートできるように学びたい」というカフェに

参加した住民の声にこたえ、講座を兼ねた隔月の「平大認知症カフェ」を大学で開催。「認知症は病気のひとつで周囲の支えが必要」ということを子供頃から理解してもらおうと、小学生から参加できるようにした。

今月開かれた大学のカフェには市民ら30人が参加。活動は広がりを見せており「運営できる福祉の専門職

＜ガーデンカフェ＞
開設：2014年10月
運営：中司さんの研究室と福山市の社会福祉法人など7団体
問い合わせ：電話(0847・54・2220)

＜平大認知症カフェ＞
開設：2016年10月
運営：大学教員や住民ら約30人で組織する協議会
問い合わせ：電話(084・972・5001)

*地域の暮らしを支える人やグループを紹介します。

格言

49年前の宮崎・日南キヤンプで、ホテルの従業員用階段に貼ってあった言葉。仕事はハードだったが、常に穏やかな気持ちでいようと心がけた。

気は長く
心は丸く
腹は立てず
命長かれ

「うれしいことはない」。その思いが、チームを陰で支える原動力となっている。(広島総局 北島夏記)

仕事、趣味、スポーツ、地域活動……。高齢になっても様々な分野で活躍する人を訪ね、いきいきと過ごす秘訣を探ります。